

カリキュラムや授業構成を工夫し 安心して自己表現できる居場所を作る

東京都品川区立第一日野小学校

品川区の保幼小連携モデル校である品川区立第一日野小学校。幼稚園や保育所との深い交流を通じ、保育の視点を取り入れた接続期のカリキュラムを作成し、45分の授業を15分ずつに分けた「モジュール授業」を取り入れるなどして、たくましく段差を乗り越えられる子どもを育てようとしている。

取り組みのねらい

- 「人、もの、こと」と深くかかわり、コミュニケーションをしたり、感動したりする力や姿勢を育てる
- 子ども一人ひとりの自尊心を育み、集団の中で自己表現できる力を培う

取り組みの内容

- 保育の視点をふんだんに取り入れたカリキュラムを作成
- 入学後5月くらいまでは15分ずつに分けた「モジュール授業」を取り入れ、徐々に45分授業に慣れさせる
- 保幼小の間で子ども同士、教師同士が人的に交流して深いつながりを持つ

子どもの変化・成果

- 生活面が安定して学習への姿勢を育む土台が培われた
- 子どもが集団の中で自分の居場所を見付けられるようになった
- 一人ひとりの子どもの良さをそのまま受け入れるなど、教師の子ども観が変化した

の石田友貴先生は次のように話す。

「研究指定を受けてから「豊かにかかわり合う子ども」が一貫した研究主題だ。研究主任

現在は保幼小連携モデル校である。

「研究指定を受けてから「豊かにかかわり合う子ども」が一貫した研究主題だ。研究主任

取り組みのねらい
自尊心を育み、積極的に自己表現できる力を付けたい

施設が併設の幼稚園・保育所と一体型であり、近隣の保育所との連携にも力を入れる品川区立第一日野小学校。以前には校長が併設園の園長を兼任していたこともあり、早くから連携が盛んだった。2009年度から2年間、区の研究指定を受けて取り組みが加速し、

S c h o o l D a t a

◎1878(明治11)年開校。2009年度から、品川区立第一日野すこやか園、品川区立西五反田保育園と保幼小連携に取り組む。10年に校舎を新設。芝生の校庭や120人収容のランチルームなどが特徴



校長 酒井敏男先生

児童数 459人 学級数 17学級(うち特別支援学級2)

所在地 〒141-0031 東京都品川区西五反田6-5-32

TEL 03-3492-6258

URL <http://school.cts.ne.jp/hino1/>

公開研究会 2014年1月24日(金) 予定

学びに向かう力を伸ばす新1年生指導

図1 スタートカリキュラム【保育園・幼稚園からの育ちを受けて】

(4月分から一部抜粋)

子どもの姿	<ul style="list-style-type: none"> 学校生活への期待感や学ぶ意欲をもって登校している 新しい環境に戸惑いを持っている 	
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> 新しい友達や学校生活に慣れる 整理整頓、集団行動の仕方を知る 生活や遊びのマナーを知る 	
主な経験する内容	生活	<ul style="list-style-type: none"> 小学校での朝の支度、帰りの支度の仕方を知る(連絡帳、教科書など) 手紙の配り方、折り方、連絡帳袋へのしまい方を知る トイレ(和・洋式)の使い方、流し方を知る トイレや水飲みは休み時間に済ませることを知る 靴箱、ロッカー、道具箱のしまい方を学ぶ あいさつ、返事の仕方を知る 廊下の歩き方、並び方(背の順、出席簿順)を覚える 給食の配膳、片付け、食べ方、手洗いの仕方を知る 日直、係・当番活動の仕方を知る 素早く衣服の着脱が自分でできる(健康診断に向けて) 防災頭巾のかぶり方、しまい方を学ぶ
	学習	<p>《聞き方》</p> <ul style="list-style-type: none"> いすに座って目を見て聞く 全体に話していることを自分のこととして受け止めて聞く 最後まで聞く <p>《話し方》</p> <ul style="list-style-type: none"> 適切な返事 伝えたい事を話す 聞こえる声で話す 手を挙げてから自分の意見を言う <p>《ひらがな、数字の学習》</p> <ul style="list-style-type: none"> 正しい鉛筆の持ち方を意識し、筆順を正しく覚える
	コミュニケーション	<ul style="list-style-type: none"> 気持ちのよいあいさつをする(笑顔、ありがとう、相手に聞こえる声) 返事の仕方「はい、～です」を学ぶ

*同校の資料を基に編集部で作成

「教科学習が得意でも、人や物事に深くかわり、感動したり、友だちと協力したりできなくては、子どもは十分に育たないのではないか。そのような考えから、保幼小の連携を通して、多様な人間関係の中でコミュニケーションを取ったり、物事への関心を高めたりする教育を研究しています」

取り組みの合言葉は「子が育ち、親が育ち、教師が育つ」だ。酒井敏男校長はこう話す。

「今は人間関係が希薄化しつつあります。そのため、学力の定着を中心とした従来の教育からの転換が必要だと考えます。子どもだけでなく、保護者や教師がつながりを深めながら共に成長し、居場所や自尊心、集団の力を高める教育を志しています」

保幼小連携では、1年生が乗り越えられる

「段差」にすることを意識している。「子どもがつまづかないことは大事ですが、段差をなくせばよいわけではありません。私たちが育てたいのは、段差をたくましく乗り越えられる子どもです」(酒井校長)

研究前は、積極的に自分を表現できないことを1年生の課題と感じていた。そこで、保幼小連携では豊かな表現力を育むことも大きな目的としている。

取り組みの内容

目前的子どもの姿から

接続カリキュラムを作成

特に力を入れる取り組みは、接続期のカリキュラム作成だ。5歳児は「アプローチカリキュラム(9〜3月)」、1年生は「スタート

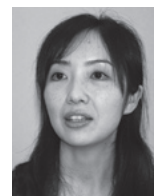
カリキュラム(4〜7月)」を作成し、園から小学校に無理なく移行できるようにしている(図1)。カリキュラム作成では、目の前の子どもの姿から考えることを重視する。

「1年生の実態を踏まえ、『こういう姿があるから、このように育てたい。そのためには、どのような力を付ける必要があるのか』というように具体的な手立てを考えていきました」(石田先生)

保幼小と小学校のカリキュラムの連続性を意識し、難易度や成長・発達を適切につなげることも重視。保幼小の教師が互いの保育・授業を参観したり、子どもの育ちについて話し合ったりして一つひとつの内容を検討した。その結果、スタートカリキュラムには保幼小の先生の考えが細かい点にも反映されている。



品川区立第一日野小学校
中村真由実 なかむらまゆみ
 研究副主任。1学年担任。「自分の考えに固執せず、周囲の意見をよく聞く。その大切さを子どもにも伝えたい」



品川区立第一日野小学校
石田友貴 いしだともき
 研究主任。6学年担任。「子どもと一緒に常に自分を振り返って、成長し続けられる教師になりたい」



品川区立第一日野小学校校長
酒井敏男 さかいとしお
 「学校は良いところ」と感じてもらうことが一番。また、鍛えない個性は野性。子どもを鍛えて個性を伸ばす」

図2

入門期の時間割

4月15日(入学後8日目)		
① 8:50 ~ 9:35	生活科 (15分)	◎ともだちになるうよ ・森のくまさんの曲に合わせて友達と自己紹介をする
	国語 (30分)	◎ひらがな ・鉛筆の持ち方、姿勢、正しい書き順を知る
② 9:40 ~ 10:25	体育 (45分)	◎かけっこ ・集団行動を知る「まわれ右」(右手方向に回る) ・手つなぎおにをする
	算数 (30分)	◎かずのなまえ ・数の読み方と書き方を知る(1~5)
③ 10:45 ~ 11:30	図工 (15分)	◎どうぶつ作り ・粘土を1つの大きな塊にする
	図工 (30分)	◎どうぶつ作り ・粘土の塊からひねり出して動物の形を作る
④ 11:35 ~ 12:20	市民科 (15分)	◎身の回りの整理整頓 ・粘土、粘土板のしまい方を知る

* 同校の資料を基に編集部で作成

例えば、プリントを配布する際、以前は自分の分を取って後ろの席に渡すようにしていたが、それをうまく出来ない子どもがいて、授業が滞っていた。それを知った保幼の先生から、園では後ろではなく、横の人に渡していると伝えられ、同様の方法にすると配布がスムーズになったという。

また、入学後の1カ月〜1カ月半は、45分間を15分のモジュールに分けて活動を組んでいる(図2)。歌や手遊びなどリフレッシュタイムは15分、国語や算数は30分、夢中になりやすい体育や図工は45分など、子どもの集中力に合わせてモジュールを組み立てる。

「最初から45分の授業は難しく、徐々に慣れるために導入しました。1年生は学ぶ習慣を身に付ける期間であり、学校になじめなく

て脱落したり、意欲を失ったりするのは本意ではありません。子どもが飽きているのを子どもの責任にせず、学校が子どもの実態に合わせることも必要だと考えます」(酒井校長)

モジュールを取り入れてから、子どもの学習姿勢は目に見えて前向きになった。1学年担任の中村真由実先生はこう語る。

「45分だと集中力が途切れていたのが、15分や30分では『まだやりたい』という思いが残り、わくわくして次の授業に臨めるようです」

園での活動を参考にし、マペットを使った指導も取り入れた。先生とマペットが会話をする演技をし、話の聞き方などを教えている。

「マペットで相手を見ない聞き方の例を見せると、子どもから一斉に『話を聞く時は相手の目を見るんだよ』と声が上がります。1年生は感情移入しやすいため、注目してほしい時に有効な方法です」(中村先生)

子どもと保護者がかかわる きっかけとなる宿題を設定

子どもと共に保護者の成長も目指し、家庭との連携にも力を入れる。12年度には「宿題カード」を始め、子どもが宿題に取り組む様子を毎日、保護者に記録してもらっている。

「保護者には『こんな勉強を頑張りました』『ここが苦手そうなので一緒にやりました』といったコメントをいただい

ています。カードを通して、学習内容を保護者が把握できるのも利点です」(中村先生)

宿題は1日10分を目安とし、学習に限らず、「肩たたき」「上履き洗い」「リボン結び」といったことも出す。入学式の日の宿題は、「担任の先生の名前を覚える」だった。

「忙しい保護者が、子どもとかかわるきっかけとなるような宿題にしています。入学式の日の宿題は、小学校の宿題は学習だけではなく、園生活の延長にあることを感じてほしいと思って設定しました」(中村先生)

人的交流も、保幼小連携の大切なテーマだ。子ども同士では、年4、5回、5歳児と1年生が一緒に遊んだり、園児が小学校生活を体験したりしている。5歳児にとっては小学生に憧れを抱いて小学生になるのが楽しみになり、1年生にとっては年下の子どもへの責任感や配慮が育まれるといったねらいがある。

「園児の頃から、入学式を行う体育館に何度も訪れるため、小学校への不安が和らいでいきます。小学校を就学前からいつでも来られる場所にしたいと考え、園に施設を使ってもらったり、校庭を地域に開放したりしています」(酒井校長)

教師の交流では、互いの保育・授業を参観する、小学校の教師が園を訪れて1日保育を体験する、月1回校長と園長が打ち合わせをして情報交換をするなどの機会がある。

「正直に言うと、最初に幼稚園を訪れた時

学びに向かう力を伸ばす新1年生指導

はただ遊んでいるようにしか見えませんでした。しかし、保育への理解が進むにつれ、実は遊びにはそれぞれ意味があり、幼保の先生方が工夫して環境を整えたり、言葉を掛けていることに感じ入りました」（石田先生）

子どもの変化・成果

生活面が安定すると共に どの子どもにも居場所が出来る

これらの取り組みの第一の成果は、子どもが落ち着いて過ごし、給食がスムーズに取れるようになるなど、生活面が安定したことだ。それが土台となり、学習への姿勢を育みやすくなったという。また、高学年になると次第に学力差が開いてくるが、交流によって異学年がつながり、互いに学び合う姿勢が育まれているため、どの子どもも集団の中に居場所を見つけられるようになった。

「自己表現を出来ることが、居場所づくりには欠かせません。1年生ではまず自分の考えを持ち、先生に意見が言えることがスタートです。自分の思いを表現できる学級をつくらうと、先生方に話しています」（酒井校長）
家庭との密な対話を心掛けることにより、心配事を早めに担任に伝える保護者が増え、ボランティアへの参加率も高まった。

そして、合言葉の最後にあるように、教師も成長している。特に保育の視点を取り入れたことで、子どもの見方が変わったという。

「研究授業では、今まで子どもの様子よりも教師に注目していましたが、連携が深まってきたから『子ども一人ひとりにどんな意味があるのか』という視点で見られるようになりました。保育を参考に、授業中の言葉の掛け方や子どもが見やすい掲示など、さまざまな面を見直しました」（中村先生）
教師に、子どもの個性をそのまま受け入れようとする態度が見られるようになったことも大きな変化だ。

「以前は、小学生としての色付けをするために、入学時は『ゼロ』から始めることを無意識に目指していたと思います。今は、子どもには入学時からさまざまな色があり、一人ひとりの良さを認めながら私たちの目指す子ども像に向けて色を付けていこうと考えられるようになりました」（酒井校長）

今後は、縦のつながり（学校種や学年、また学習系統）と、横のつながり（人、もの、こと）を連動させて子どもを更に伸ばしていくカリキュラムへと改善していく考えだ。

品川区は学校選択制のため、12年度は16園から入学者が来た。現在は特定の園のみの連携を他園にも広げて、現状の点と点から面へとつながりを広げることも課題の1つだ。

「保幼小連携の取り組みをより充実させてつながりを強化すると共に、それぞれの学校の質を高め、『いつも前向きに生きる子ども』を育てていきたいと思えます」（酒井校長）

学校をつくり、動かすチームワーク

校長・副校長の役割

保幼小連携は「哲学」がぶれてしまってもうまくいきません。常に哲学を念頭に置き、それを事あるごとに先生方に話すことは、校長の役割だと思います。園との関係づくりも大切にしています。特に心掛けているのが、園から見て小学校の敷居が低く感じられるようにすること。そのために、施設が空いている時は自由に使ってもらっています。また、併設園に1日1回は顔を出し、気軽に話し合えるようにしています。

校長 酒井敏男先生

ミドルリーダーの役割

管理職の先生が方針を出した際、分かりにくいことがあれば、明確になるまで説明を求めるのが、研究主任の役割の1つだと考えます。校長先生の話が分かりにくければ「分かりません」と言うようにしています。若手の先生方が研究の意味を理解するのは大変ですが、意味が分からないまま研究しても実にはなりません。しっかり質問し、私自身も悩みながら追求している姿を、若い先生方に見せたいと考えています。

研究主任 石田友貴先生